

「縄文土器研究の基準的な資料」

むかいあぶら だ

向油田貝塚

香取遺産

Vol. 19

▶向油田貝塚出土の縄文土器



向油田貝塚は、山田区の神生字たらの木地先にある縄文時代中期（4～5千年前）を中心に形成された貝塚です。黒部川の支流である清水川によってつくられた狭隘な谷を望む台地の斜面にあり、東西2カ所の貝層が確認されています。

黒部川流域に広がる沖積平野を取り囲む台地上には、国指定史跡の阿玉台貝塚や良文貝塚をはじめ、数多くの貝塚が存在します。これらの貝塚は、古くから多くの研究者が当地を訪れ、発掘調査を行ったことから、全国的に知られるようになりました。本貝塚は、昭和17年に初めて学界で紹介されて以来、

昭和20年代に相次いで発掘調査が行われました。特に、昭和26年、早稲田大学の西村正衛氏によって行われた発掘調査では、阿玉台式土器の変遷を、出土層位によって確認できたことにより、その後の阿玉台式土器研究の基準的な資料となりました。

縄文時代について書かれた本を開くと、「阿玉台式土器」という土器型式名を必ずと言ってよいほど目にします。阿玉台式土器は小見川区の阿玉台貝塚で出土した土器を標準として設定された型式で、関東地方の縄文時代中期を代表する土器型式のひとつです。粘土紐を帯状に貼り付けた文様や、

幅の狭い板状工具や半分に割った篠竹の先端を連続して押し付けた文様が主で、胎土に金雲母を多く含むことが大きな特徴です。

本貝塚では、現在でも地表に貝殻や土器の破片が散布しているのを観察できますが、西村氏の調査以降は本格的な調査は行われておらず、貝層の正確な位置や範囲を知ることができません。なお、向油田貝塚は、昭和53年8月20日付けで山田町文化財に指定され、合併後は香取市指定記念物（史跡）となつています。また、出土した土器の一部は、市文化財保存館（くろべ館2階）に展示されています。